



東側から見た雲林院城跡の遠景（鉄塔手前の山頂付近が主郭）

安濃川上流の芸濃町雲林院地区から県道42号を西へ向かうと、左手に美濃夜神社が見えてきます。この神社は、かつて溝淵大明神と呼ばれ、神社に残っている弘治元（1555）年の棟札には、寄進者として雲林院氏の名前が記されています。雲林院氏は、鎌倉・室町時代に、現在の美里地域に本拠を置いた長野氏の一族で、神社裏の山頂にあった雲林院城の城主だったとされています。城跡は、平地との高低差が70mほどあり、東に安濃川の上流から中流までを望むことができ、城跡を川沿いに西へ向かうと伊賀地域へと至る交通の要衝でもありました。



雲林院城跡は、山頂の主郭を中心に複数の尾根筋に広がり、多くの曲輪や堀切が設けられていた当時の様子をしのべています。主郭の背後も、堀切や土塁で守られた強固な造りで、当時の守りの堅さをうかがい知ることができます。

（「広報津」平成26年9月16日号）

支配を支え、一族の中で長野氏に次ぐ格の高さであったことが、室町時代の資料からうかがえます。永禄年間（1558～70）年には長野氏とともに北畠氏の配下となりましたが、織田信長の伊勢侵攻の際には、長野氏の養子に入っていた北畠具藤を追放し、織田信包（信長の弟）を養子に迎え、織田方に下ります。その後、雲林院氏が安土城の留守を預かる役の一人であったという記録も残っています。



雲林院城跡縄張図
（伊賀中世城館調査会「古城雜記」調査日誌第210号に加筆）